

関西における女流能（観世流）の先駆け：
奥村富久子と『花乃むかし』
A Noh Actress: Fukuko OKUMURA

宮西 ナオ子

MIYANISHI Naoko

Noh, founded by Kan'ami and Zeami in the late 14th century, is a spiritual type of drama and has been developing for over 600 years. One problem in Noh is that it had been only performed by men until the end of World War . After the war, female performers were admitted as professionals into the Japan Noh Society, though their performances were not properly evaluated. There has yet been no female performer granted the title of living national treasure in spite of their qualifications. In this paper, I have interviewed Fukuko OKUMURA, one of the first female Noh performers in the Kansai area and introduced her life and art.

1. 関西初の女流能楽師、能楽師同士の結婚、海外公演

ここに一冊の美しい本がある。『花乃むかし』というタイトルで能楽師の南條秀雄と奥村富久子の共著である。おそらくプロの能楽師同士として結婚し、共に舞台に立った最初の夫婦であろう。この本は、昭和61年南條秀雄が亡くなった翌年に出版された。

森田拾史郎の写真集、『能を舞う女たち』には以下のような奥村のコメントが見られる。

夫南條秀雄の死とともに私は能を舞い納めました。身心の全き充実があってこそ勤められる能にこの時点で終止符を打ったことは、夫とともに共宰しました「散る花の会」の主旨にも沿うことなので悔いはありません。次に私が能を舞うのは次の世にいつからでございます。その意味でこれらの写真は私のこの世に残す形見でございます。¹

夫と共に舞い、夫の死と共にきっぱり能の舞台から降りた。まるで殉死をするような潔さを見せる奥村富久子とはいったい、どのような人物なのか。また奥村富久子は、関西初の認定女流能楽師の一人であり、女性として海外初の演能をした。昭和58年に英国公演。『花乃むかし』の南條秀雄年譜の中には、南條について以下のような記述が見られる。

昭和58年、2月英語能「ハムレット」の東京公演（於矢来能楽堂）実現に導く。同年4月、「南條奥村能楽団」団長として渡英。宗片教授とブリストル大学のジョージ・プラント教授の合意で奥村富久子の「砧」を公演。わが国の女流能楽師として初めての海外公演であった。ブリストル2日、ロンドン1日、スコットランドのグラスゴー2日、いずれも好評、満席で、殊にロンドンのサドラーズ・ウェルズ劇場（座席数1800）は、超満員で、主任のレミントン氏より再度の公演を希望される。²

という記述が見られる。また平成8年の朝日新聞の夕刊には、当時のことを振り返り宗片邦義³が以下のようなコメントを残している。

公演に同行した静岡大人文学部教授（英文学、芸能文化論）の宗片邦義さん（61）は、ふり返る。「最初の年、ロンドン公演で人々は奥村さんがシテを務（ママ）めた『砧』を涙をこらえて見ていた。グラスゴーへ移動したあと、ロンドンの劇場からもう一度、ロンドンに戻ってくれと要請があり、翌年、ロンドンで5日間の連続公演となった」⁴

平成14年9月22日。奥村富久子にインタビューする機会を得た。大正10年生まれ奥村富久子は、81歳になるはずなのに、待ち合わせのロビーで、まるで西洋人形のように美しいドレスを身にまとい、若々しく座っていた。

ご主人であり、能楽師の南條秀雄が亡くなって以来、能の舞台に立つことはないが弟子の稽古は現役で行なっているという。面会前に法然院の南條秀雄の墓を訪ねた。そのとき、涙が止まらなくなった。それは、二人の愛の深さゆえ、その思いの深さに感動したのだということが、奥村富久子に会ったときに初めて理解できた。南條秀雄のことを語るときの、彼女の美しさ、神々しさに、思わずうっとりとしてしまった。

2. 生い立ちからプロになるまで

以下、奥村富久子のインタビューをまとめた。ここで奥村富久子の生い立ちを振り返ってみたい。平成8年『朝日新聞』の夕刊に掲載された奥村富久子のインタビューには、以下のような記述があるので引用する。

京都・下京の海産物問屋の一人娘。幼い頃、京舞のけいこをはじめ、仕舞、長唄なども習った。旧家の次男と結婚して男の子を産んだが、終戦直後に夫が病死したため、子を連れて実家に復籍。脱力感のなかで「精神的な支えに」と求めた能の世界だった。⁵

奥村の実家は海産物問屋であり、彼女はそこの一人娘。「嬢さん、嬢さん」と呼ばれて、育ってきたという。奥村の母の弟が家を継がなかったために、母が養子をとった。しかしその父と母は2年足らずで離婚。奥村は父の顔を知らなかったという。奥村は8歳の時から地唄舞（京舞い）を始めている。

その後、年頃になると見合いで結婚。あまり楽しい結婚生活ではなかったというが「一人娘で辛抱がない」と言われるのが嫌で、自分では頑張って結婚生活を営もうと思っていた。しかし結婚生活満2年で、ご主人が結核で亡くなってしまった。子供が満1歳のときに、子供を連れて実家に帰った。

終戦の時、奥村は、夫の死と敗戦とが重なり、そのときはとてもつらい思いをした。脱力感でいっぱいになり、「子供が産まれたことは、はたして幸せだったろうか？」と思ったほどだという。そのような絶望に近い気持ちでいたときに、本家のいとこが、「河村禎二さん（奥村が13歳の時に師事していた河村道也師の弟）についてお稽古するからこないか？」と誘ってくれたのである。

それがきっかけになり梅若猶義の能「天鼓」をみて、「こんなに美しいものが、今、この世の中にあるのか！」と感動し、生きる希望を得たという。そのころ東京は焼け野原になったが、梅若猶義は、京都は大丈夫ということで、京都に移ってきていたのである。

それを狂言の武藤達三さんに言うと「河村道也さんは亡くなったのだから円満に、こちらへ来たらどうか」と言われた。そのころ世の中は汚れて、見た目にも汚い時で、何もかも嫌に思っているときだった。奥村富久子は、このような世界の中で、能のようなきれいなものを見て「これをやりたい」と心から思ったのである。

奥村富久子が、プロになったのは 昭和23年、秋のことである。満26歳だった。長い間、能とは男性の演じる芸能として発展してきたために、女性がプロとして能楽師になるのは、奥村の時が初めての試みだったという。

現在では女流能楽師は約231人⁶ もいるが、女性がプロの能楽師として認められたのは、昭和23年2月に四谷千代子、山階敬子、丸山登喜江が能楽協会会員に加えられ、3月には後藤勝子、4月に津村君子^(ママ)が能楽協会に会員登録をして、11月には奥村富久子が師範を許されたのである。⁷

奥村は、師範披露能で、「菊慈童」と「葵の上」を抜いている。⁸ 「そのころ、関西で第1号1期生として10人くらいが同時に女性能楽師となり、『七曜会』をした」と奥村はいう。プロとしての経歴はすでに55年になるが、演能生活は、南條が亡くなってからは辞めている。

当時のことを奥村は「今はプロになるためには、試験があるが、私のときは試験というものではなく、先生の推薦があれば免状がもらえた」といっている。ちなみに奥村の師匠は、初代の梅若猶義であるが、その後、観世喜之（先代）になっている。

3 . 南條秀雄との出会い

奥村が南條秀雄と出会ったのは昭和22年のこと。富久子がプロになる前年である。奥村は離婚してから、今後の人生は「能一筋でやっていくつもりでいた」という心構えでいた。

「出戻って帰ってきたとき、まだ24歳だったので、周りは縁談を勧めましたが、結婚はもうこりごりだと思っていました。母が離婚して、また私が最初の結婚では苦労したから。南條秀雄に会うまでは、結婚は考えていなかった」というのである。

ましてや南條と奥村は同じ年である。今でこそ同じ年の男女の結婚は珍しくないが、当時は男性が数年年上で女性が年下というのが一般的だったのである。だから奥村も同様、「同じ年の男性と結婚するなんて、考えたこともなかった」といっている。

しかし『花乃むかし』には、当時の二人の思いが収録されている。南條秀雄から寄せられたラブレターなども、原文のまま掲載されており、時には奥村富久子の返信も掲載されている。

彼からは三日と置かずには便りがあり、私は朝涼の庭に出て、カタリと音がして、郵

便受けに彼の手紙が落ちるのを待つ日がつづいた。⁹

という記述が見られる。このような手紙を交換しながらも、お互いの人間性に惹かれていったのであろう。「南條はどのような時でも、やさしい人だった。こんなさわやかな人に2度と会えない」と思って富久子は結婚を考えるようになったのである。

昭和24年の秋、富久子27歳で再婚をした。ところが、能楽師同士の結婚ということで、同門が結婚するのは、「前例がないため許されない」という激しい反対にあったのである。能楽協会からは破門になる可能性もあり、舞台も借りられない状態が続いた。

とはいえ二人とも独身であり、結婚できない立場ではない。しかも二人の決意は固い。谷崎潤一郎と妻の松子夫人が強力な後援を惜しまなかった。

「谷崎先生もご自分が結婚で苦勞されたから（佐藤春夫と千代子夫人）困っている他人のことで心配して下さったのでしょ」と当時のことを振り返って奥村は語る。

ほかにも金剛流の家元（先々代）をはじめとして、広辞苑の編集に携わった新村出は、（奥村は戦争の真最中に京都大学に勤めていた）そのときは名誉教授だったが、「同門の能楽師同士が結婚するからといって破門するのはおかしい」と新聞に書いたこともあり、マスコミは、南條、奥村の結婚に好意的だった。

二人を応援してくれる有名人が多かったために破門されずにすみ、昭和24年10月、谷崎潤一郎夫妻が媒酌をして二人はめでたく夫婦となった。折しも新憲法で、両者の合意があれば、結婚ができることになったばかりだった。

とはいえ、結果的には師の同意を得ることができずに、退門することになった。師匠のない状態が5年続いたが、昭和29年6月に大阪山本能楽堂にて転籍披露を行なった。鈴木一雄家に転籍し、芸事指導は観世喜之（先代）に受けることになった。¹⁰

「プロなのに5年間もどこにも所属していないということで弟子のうち半分くらいは辞めていったが、母は黙って私たち二人の面倒をみてくれた。このような母の計らいを南條はとても感謝してくれていた」とも奥村はいう。

4. 南條秀雄との別れ、能の舞い納め

論議を醸した結婚だったが、結婚生活は多分に幸せだった。「主人とはいつも一緒でした。家でも舞台でも一緒なので周りから、驚かれるくらいだった。でも結婚生活36年の間によ

そこに泊まったのは、姉の結婚式で2日とあと少しだけ。両手でも余るくらい。ほとんど一緒で、相性がとてもよかった。でも得意なことがまるで反対だった」と奥村富久子は、南條を語るとき、本当に嬉しそうな笑顔を見せる。

常にぴったり一緒であり、お互いに尊敬している。理想の関係だったといえよう。南條の人物像について奥村は語る。

「とにかくとてもよい人で、仏様が髪の毛を1本抜いて人の形にし、『あそこにヘンな女の子がいるから助けてやれ』と言ったのではないかと思うほど。この世の中に、すばらしい人、偉い人は沢山いるが、何の努力もしなくても、南條のように最初から善意の固まりのような人というのはあまりいないのではないか？」ともいう。

南條は奥村が舞う時、後見や地謡をすることが多かった。また南條が舞う時に奥村は後見で出ていた。たびたび結婚式に頼まれて二人で舞うこともあった。その場合は、奥村が地謡で、南條が「高砂」を舞ったり、反対に南條が謡って奥村が「花筐」を舞ったりした。

奥村の語る最もうれしい思い出というのは、昭和32年9月に大阪大槻能楽堂に於いて、能「道成寺」を披曲したことだという。関東の女流能楽師として先駆けといわれる津村紀三子が東京で披いてから半年遅れのことだった。「関西では初めてで、大槻能楽堂が立ち見でいっぱいになる盛況でございました。谷崎先生も来てくださりまして、たいそう喜んでいただきました」と奥村富久子は語っている。

そのとき「何よりもうれしかったのは、元の師匠の梅若猶義先生と仲直りができ、晴れの舞台に地頭を勤めてくださり、鐘後見は現在の師、観世喜之(先代)、南條も加わりました。現在の師に後見を務めていただいた上に、後見には雅雪師(その頃は、鍔之丞と名乗られ、現在の鍔之丞氏からは、先々代になる)、鼓は大倉長十郎師(大倉流宗家先代)という顔ぶれでした」という。¹¹

その後も二人の活動は続き、昭和49年、銀婚記念能を演じ、昭和53年、「散る花の会」を設立した。とはいえ、おしどり夫婦で能を演じる二人の舞台風景は、昭和60年に、突然、終わりを遂げた。

その年の11月、大阪・大槻能楽堂で、第15回「散る花の会」があったが、その後しばらくして、南條が稽古の後に倒れ、入院。心筋梗塞で、この世を去った。享年64歳。奥村も同じ64歳で能を舞い収めた。その後は、習いたいという人だけには教えているという。

南條秀雄は、奥村富久子に、「お前さん先に逝きなさいよ。俺は跡の始末をちゃんと着けて逝くからな」とよくいっていたという。その言葉のためか、彼女は、夫の後に残る自分

というものを全く考えたことがなかったというのだ。¹²

それが突然の死。時が経過した今でも、南條秀雄の死については、思い切って彼女に聞くことができなかった。まだまだ生々しく、痛々しい。そこで当時の話しを掲載した新聞や御著書『花乃むかし』から抜粋する。

平成8年『朝日新聞』の夕刊には、

36年間、ともに能楽師として研鑽を重ねた夫の死。ぼうぜん自失。成人した息子や知人たちが「あとを追うのでは」と心配した。しかし倒れた夫がベッドの上で心配していた翌月の高松市の舞台はつとめなければならない。「砧」を精魂傾けて演じた。訴訟で上京したまま3年も帰らぬ夫を待ちわびる妻の姿――客席の涙を誘い、「能」の舞納めとなった。¹³

また共著『花乃むかし』には、以下のような記述も見られる。

私は未だこれが現実とは信じられず、呆然と涙を流し続けるばかりであった。人間失格。その後の幾日かは、変容するほどに泣き続け、(中略)知らぬ病院で、知らぬ先生のお世話になって亡くなってしまったこと。私がついていながら言葉が足りなかったのではなかったかの思いが胸に残り、(中略)生きていることさえ不貞に思われるほどであった。¹⁴

とある。一人生きることが不貞に思われるほどの愛情。そして奥村富久子は新聞のインタビューに答えて以下のように語っている。「身に過ぎた夫に恵まれ、幸せな月日を送ることができた。あの世での再会を楽しみにしています」¹⁵

さらに奥村の句。

日々に遠く花の昔は去りゆけど、
君に^{また}再会ふ日の近づける

富久子¹⁶

5. まとめ

女流能楽師の先駆けとして光りを放つ奥村富久子の場合、なんといっても南條秀雄あつての能だろう。そして彼女の場合は、子どもの時から京舞をたしなみ、能という美しいものを観て、能の世界に入るといふ、きわめて自然な形で、能に誘われている。文才もあり、美人。華がある。

谷崎潤一郎を含めて周辺の人が応援してくれたというのもよくわかる。応援せずにはいられない魅力がある。神様に愛されている人という印象がある。なぜならば彼女は多分、本当に愛することを知っているからだろう。

奥村富久子と比較するわけではないが、津村紀三子の場合は能をしたいがゆえに、周辺との亀裂を生じ、多くの不協和音を奏でてきたという印象が強いように思う。例えば中森晶三は、『孤軍奮闘の能楽人生一代記中森晶三』で、津村紀三子について以下のようなコメントをしている。

稽古場の先輩は「熱心ないい先生だが我が強く我侘だ」と云っていたが、病中面倒を見てもらった引け目からか、私にはまことに優しくかった。ただ女の悲しさで嫉妬が強く、弟子がいったん「先生より誰々さんが」という話が出ると途端に態度が豹変してしまう。それで折角育てたい弟子を次々と失ってしまった。(中略)先生は自分に役がつかないとすごく機嫌が悪く、客の反応には全く関心がない。これが古典芸能界の体質なことは判っていたが、客の評価を第一に考える私にとって耐えられないことだった。先生も年老いてますます頑固になり、ついに些細なことから「あんなの地謡で能なんか舞えない」などといわれ絶交せざるを得なくなった。(中略)あたら才能があり、超人的な努力もしながら報われない人生だったと気の毒に思う。¹⁷

といている。また金森敦子も『女流誕生』の中で、

正式に女性師範が許されたといっても紀三子だけにはいまだに反感がついてまわっていた。能楽界のしきたりを破りながらここまでやってきた紀三子は、自分が破ってきたしきたりにその足をすくわれてしまっていた。¹⁸

といい、そして紀三子が「道成寺」を披いた時のいやがらせについて記述しているが、もう一方では以下のようにもいっている。

丸山登喜江の妹の鷺見敦子(観世流シテ)は、一緒の舞台で「羽衣」を舞っていて、姉の登喜江が「道成寺」を披くまでのことをつぶさに見ていた。彼女には姉が嫌がらせを受けたという記憶はまったくない。装束にしろ、面にしろ、借りることはすんなり決まったし、鐘を作るときも周囲は協力的だった。小鼓をはじめ、囃子方、地謡とのトラブルは何もなかったという。一方では陰湿な嫌がらせを受け、一方は何の問題も起らないというのは、津村紀三子と丸山登喜江との性格によるのかもしれない。だが紀三子は確かに芸においては激しかったが、日常では単純で、涙もろく、人の好い女性であった。それなのに能の世界では、強情、横紙破り、狂信的と言われていた。流儀に逆らい、能楽界の実力者の庇護のままに在ることを潔しとしなかったからだ。¹⁹

というように一方では、嫌がらせを受け、一方では協力を得ている。これは後ろ盾や経済力などもあるかもしれない。またいかに「執着」していたかということもあるかもしれない。奥村富久子の場合も南條秀雄との結婚によって、能楽界に波紋を投げかけた1人であるが、多くの人が奥村の味方になった。

それは、ひとえに彼女の人徳というか、神様に愛される特質のせいかもしれないと思っている。さらに、奥村富久子は南條との精神的な融合によって、女性としても、芸道の面でも、そして生きるという意味でも満ち足りていたのだろう。女流能楽師の先駆けとして、そして美しい生き方の手本として、奥村富久子の存在は今も輝いている。

【参考文献】

Kuniyoshi Ueda *NOH ADAPTATION OF SHAKESPEARE* Hokuseido, 2000

表章・加藤周一校注『世阿弥・禅竹』日本思想体系、岩波書店、1974年

金森敦子『女流誕生 能楽師津村紀三子の生涯』法政大学出版社、1994年

観世寿夫『観世寿夫著作集(全四巻)』

一・世阿弥の世界、1980年、1998年5刷 二・仮面の演技、1981年、1998年5刷

三・伝統と現代、1981年、1998年3刷 四・能役者の周辺、1981年、1998年3刷

観世寿夫・荻原達子編『観世寿夫 世阿弥を読む』平凡社、2001年

小林保治・森田拾史郎編『能・狂言図典』小学館、2000年

権藤芳一「誰にもわかる能のみかた」東洋文化社、1987年

斉藤太郎『観世流謡と仕舞の手引』檜書店、1969年初、1998年第11刷

竹本幹生・橋本朝生編『能・狂言必携』學燈社、1996年

田口和夫『能・狂言研究』三弥井書店、1997年

津村紀三子『散り来る花に』緑泉会、1987年

津村紀三子『散り来る花にー津村紀三子十三回忌記念出版』緑泉会1986年
 津村禮次郎『能がわかる100のキーワード』小学館、2001年
 中森晶三『孤軍奮闘の能楽人生一代記 中森晶三』デントーアート、2001年
 南條秀雄、奥村富久子『花乃むかし』中央公論事業出版、1986年
 西野春雄・羽田昶編『能・狂言辞典』平凡社、1987年
 西野春雄・竹西洋子『能・狂言・風姿花伝』新潮古典文学アルバム、1992年
 林望・津村禮次郎・金森敦子・児玉信・森田拾史郎写真集『能を舞う女たち』新人物往来社、1995年
 平岩弓枝『伴侶の死』文藝春秋社、2001年2月初刷、2001年3月第3刷
 増田正造『能入門』淡交ムック、1995年
 増田正造『能百番』平凡社カラー新書、1979年、1988年4刷
 増田正造・戸井田道三著『能をたのしむ』平凡社カラー新書、1976年1刷り、1985年6刷
 丸岡大二、吉越立雄共著『能鑑賞のために』カラーボックス、保育社、1966年
 宗片邦義『日英二ヶ国語による「能・オセロー」創作の研究』勉誠社、1998年
 毛利三弥編『新版 東西演劇の比較』「能の歴史と特色」、「狂言の歴史と特色」宗片邦義、日本放送出版協
 会、1993年

-
- 1 林望、津村禮次郎、金森敦子、児玉信、森田拾史郎写真集『能を舞う女たち』p.107
 - 2 南條秀雄、奥村富久子『花乃むかし』p.669
 - 3 現・上田邦義。日本大学大学院総合社会情報研究科文化情報専攻教授
 - 4 『朝日新聞』平成8年7月9日夕刊
 - 5 同上
 - 6 『能楽手帳』2002年版名簿を計算
 - 7 金森敦子『女流誕生 能楽師津村紀三子の生涯』p.203
 - 8 同上 p.203
 - 9 南條秀雄、奥村富久子『花乃むかし』p.491
 - 10 同上 p.666
 - 11 同上 pp.548-554
 - 12 同上 p.699
 - 13 『朝日新聞』平成8年7月9日夕刊
 - 14 南條秀雄、奥村富久子『花乃むかし』pp.650-51
 - 15 『朝日新聞』平成8年7月9日夕刊
 - 16 南條秀雄、奥村富久子『花乃むかし』p.663
 - 17 中森晶三『孤軍奮闘の能楽人生一代記中森晶三』pp.97-98
 - 18 金森敦子『女流誕生』p.207
 - 19 同上 pp.209-10